

56 八十日間世界一周 (2021年5月13日)

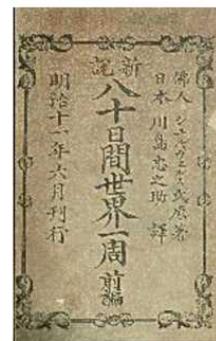
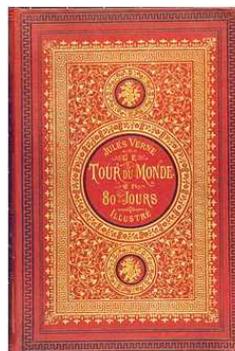
パリの古本屋を通りかかったとき、ジュール・ヴェルヌ (1828-1905) 作「八十日間世界一周」(1872年出版)が、ショーウィンドウに飾られていることに気付きました。なぜこの本に目が留まったかと言うと、この本が日仏文化交流の歴史の中で重要な役割を果たした作品であったことを知ったからです。



Jules VERNE
ジュール・ヴェルヌ

実は、これはフランス語から日本語に直接翻訳して出版された最初のフランス文学作品なのです。この本を翻訳したのは、川島忠之助 (1853-1938) です。川島は文学者ではなく銀行家でした。フランス語と英語を勉強した川島は、欧米諸国に蚕糸を売り込むための使節団の通訳兼ガイドとして、世界一周の旅に出ました。川島は、旅の途中で出会った英語版を読んでこの本の面白さを発見し、すでに手元にあったフランス語原書を翻訳し、1878 (明治 11) 年に自費出版しました。その後、川島は銀行員としてリヨンに駐在しました。

私はこの本を読んだことがなかったので、現代日本語訳で読んでみました。主人公のイギリス人資産家のフィリアス・フォッグが、フランス人召し使いのパスパルトゥールを従えて、旅の途中で様々なハプニングに遭遇しながら八十日間で世界一周を試みるお話です。



Le Tour du monde en quatre-vingts jours
「八十日間世界一周」

物語の中では、横浜も登場します。19世紀後半の日本は、欧米諸国との本格的な交易を始めたばかりで、横浜には外国人居留地が作られ、外国人が往来する数少ない町でした。活気に満ちた横浜の様子が描かれており、本を読みながら、当時の日本にタイムスリップしたような気分になりました。

翻訳者の解説によると、フランス語原本では、時間の計算のつじつまが合わなかったり、作者の勘違いによる誤った記述があるそうです。しかし、テレビもインターネットもなかった時代に、詳細な描写ができるほど外国の情報をよく集

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

めることができた后感心します。ヴェルヌの出身地ナントは貿易港として栄えた町でしたから、外国の様々な情報に接しやすかったのかもしれませんが。

当時の人々は、この本を読みながら、主人公と一緒に船や鉄道を使った世界一周の冒険を楽しんだことでしょう。ヴェルヌと川島のおかげで、日本人も世界の多様性や日本とは異なる価値観を知ることができました。この作品は、文学も日本とフランスの交流と相互理解に貢献していることを教えてください。